

なんとなく気ぜわしい紅葉の季節。それでも九人と、ほほいつも通りの顔ぶれで第十二巻を読み進みました。大塔宮護良親王、後醍醐天皇、足利尊氏と、ともに討幕で手を組んだ三人が、軍事・統治をめぐる基本理念の違いから反発を強め、抜き差しならぬ権力闘争に落ち込んでいく経過がこの巻のテーマでした。輪読した個所は次の通り。次回は例会終了後の年忘れの小宴を予定しています。

(一) 公家一統政道の事

護良親王の入京遅延

(P213～218)

大塔宮護良親王は後醍醐天皇の還都後も、「足利尊氏を除かなければ北条政権の二の舞になる」として、信貴山に立て籠り動かなかった。困惑した天皇は親王に武門トップを意味する征夷大將軍の職位を与え、やっと親王を入京させた。

混迷の建武新政

(P220～223)

綸旨万能を掲げる後醍醐の建武新政下、所領安堵や恩賞を求める武士が全国から京に殺到した。担当の公家たちは公平な処理実現に奮闘したが、天皇周辺からの介入などと思うに任せず、辞職が相次ぐ。役所の繁忙に対処するため、訴訟処理専門の「雑訴決断所」を新設、内裏も拡張したが、天皇はさらに平安京時代の内裏再建を決断。地頭、御家人への課税強化を伴ったため、反発が渦巻いた。

※里内裏

平安京の大内裏は大火などで荒廃し、鎌倉中期には皇居の内裏も炎上して再建されず、「内野」と呼ばれる荒れ野と化していた。替わって

公家の邸宅が皇居に利用されることが常態化し「里内裏」と呼ばれた。御醍醐天皇は先代の花園天皇の里内裏、「二条富小路殿」を引き継いだ。この内裏は建武三年(1336)正月の足利軍の京都侵攻で炎上、尊氏が擁立した光明天皇は土御門殿を皇居とする。以後、明治維新まで歴代持明院統の皇居となり、上皇の仙洞御所、女院の大宮御所、公家屋敷などが加わって現在の京都御苑に至った。

(二) 安鎮法の事

諸国騒乱の兆し

(P248～251)

第14巻輪読予定(2020年1月20日)

- 1) 345 足利宰相～348 げられたり
- 2) 356 則ち諸卿～360 者なし
- 3) 362 大手、搦手～366 着きにけり
- 4) 370 日すでに～373 覚えたれ
- 5) 374 さる程～377 定まりにけり
- 6) 382 竹下へは～384 肉の如し
- 386 一陣余り～387 落ちて行く
- 7) 387 大手箱根～389 馳せ参る
- 391 かくて浮島～393 給ひけり
- 8) 396 かかる処～400 申しける
- 9) 403 さる程～407 心ありけり
- 10) 407 明くれば～410 ひかへける
- 11) 410 かかる処～413 帰りけり
- 12) 414 山崎～415 知られたり
- 419 明くれば～421 覚えたり

北条残党が筑紫、紀伊、伊予などで反乱、朝廷は天下安泰の祈禱を行う一方、楠正成を紀伊の賊徒討伐に向かわせるなど対応に追われた。また、討幕の功労者への恩賞給付を急ぎ、体制の引き締めを図ったが、不公平もあり、火種を残した。

(三) 千種頭中將の事 (五) 文観僧正の事

朝恩に誇る (P251～254)

後醍醐天皇に寵愛された千種忠顕、僧文観は、贅沢三昧や派手な行動にふけり、世の誹りを買った。

(七) 広有怪鳥を射る事

紫宸殿の不吉

(P260～264)

疫病が流行し、内裏に不吉な鳴き声の鳥が飛来した。この鳥を左大臣の家来、隠岐次郎広有が射落とし、天皇から官位と所領を賜った。

(九) 兵部卿親王流刑の事

護良親王を逮捕、流刑

(P271～278)

護良親王は足利尊氏を討とうとした。尊氏は、逆に、親王が帝位を奪おうとしていると、天皇に寵姫阿野廉子を通じて密告。真に受けた天皇は、親王を偽って宮中に召し、側近の武士らに逮捕させた。親王は、無実を訴える書状を出す、取次の公卿に握りつぶされた。身柄引き渡しを受けた足利方は、親王を鎌倉に移送、二階堂谷の獄に拘禁した。

※梅松論の見方 足利寄りの「梅松論」は、護良親王の尊氏襲撃を後醍醐の真意だったとし、露見を恐れ罪を親王にかぶせたのが真相と見ている。親王は「武家より天皇を恨む」と独白した、という。